

パネルディスカッション

同志社大学文学部教授 岩 坪 健
同志社大学名誉教授・埼玉大学名誉教授 矢 野 環
作家 夏 山 かほる
九州大学大学院システム情報科学研究院教授 竹 田 正 幸
富士ゼロックス京都株式会社
マーケティングサポート部文化推進 CSV グループ長 吉 田 謙 一
司会 同志社大学文化情報学部教授 福 田 智 子

福田 それでは、パネルディスカッションに移りたいと思います。これまでのご講演者に加え、竹田正幸先生が参加されます。竹田先生、どうぞよろしくお願いします。

竹田 よろしくお願いします。

福田 せっかく竹田先生が参加してくださっていますので、まず竹田先生にちょっとお聞きしたいと思います。夏山先生の『新・紫式部日記』なのですが、その序のところとか他のところもありましたが、先生のご研究の成果がもうほとんど生の形で出たかなと感じております。

先ほど夏山先生が「人を思う心は雁に……」のこの歌と、「人の親の……」の歌を例に出してくださっていましたが、実はこれは、古今集の歌と後撰集の歌を、総当たりで、いわゆる「類似歌を探せ」というのを、今から何十年も前にやりまして、

今ここに、竹田先生に来ていただきましたのも、実はこういう無味乾燥な数値でもって、「えいやーっ」と似た歌を探せということでやった結果が、一つこういった血の通った小説に生まれ変わったということで、私もこんなことがあるものかなあと思いました。

それでは、竹田先生、その辺りは情報科学のご専門というところで、いかがでございましょうか。

竹田 まだ21世紀になる前にやっていた話で、懐かしいです。とにかく和歌の新編国歌大観というCD-ROM版が確か平成8年に出まして、「それをひっくり返して全部付き合わせたいよね」と、当時は助教授だったのでそういう話をしました。それをひっくり返して、実際にやるということで類似しているということはどういうふうに扱ったらいいかというのを、結構、夜中までディスカッションをしました。今は、ビッグデータという言葉がすっかり定着しちゃったかもしれませんが、当時はビッグデータという言葉は当然ないのですが、もうそういったコンセプトで、特に九大中心に、ディスカバリーサイエンスというのをやっていました。地球物理から文学作品までというキャッチフレーズでいろいろやっていた時期です。

和歌の集積の中で、何か知見が得られないかということでやった結果も、先ほどの説明にあったように、大変単純な、何文字一致したかに、ちょっと毛が生えたようなやり方で、1,000首と1,500首ぐらいですか、うん百万ぐらいの組み合わせをやって、

点数が高い方から上位 100 ぐらいを見ましようかと。確か、これは 35 位とかその辺に出たのだったと思います。

私などが見ても、見逃すわけですけど、専門の方が見ると、お、とそこで止まるという。ここにあるように新聞記事に出ているのを見ると、誰が見ても似ているわけですが、往々にして気がつかない。機械を使ったので、分かったかと言えば分かったというか。そこできっかけができるということです。

これは結果が出たので、もう一つは類似歌でやったのは、歌集の成立年代が大きく変わるという話です。これは情報の世界で話すとともに伝わります。考古学的な興味で分かるのですが、こちらの方は難しい。つまり、ある歌はある歌の替え歌であるというようなことを分かった、というのはどういう意味なのかが取れないんです。

この記事を取材してくださった記者さんは非常に理解は深かったんですが、見出しを付けるのはデスクさんなので、名歌を「借用」と、ちょっと不思議な書き方をされています。これを一般の人が読むと盗作だという感じで、「盗作が見つかったということだよ」と言われて、どう説明していいか分からないという感じがちょっとありました。今回、夏山先生の作品を見て、私が必死で説明しようとしていたようなことが、小説としていきなり冒頭にありまして、これをその時に書いてくだされば楽だったのに、とそんな感じがしたぐらいです。だから、替え歌というのが、普通に認められて、むしろ本人の前でやっているわけですけども、そういうようなことが文化で、盗作という観点でしか見ないよう

な人たちに説明するのは非常に大変だったということです。

それで、冒頭にあるのは、すごいなということで感心して、それからもう1回開いてみたら真ん中あたりにどどんと重要な場面で出していただいて、この小説の中心になってるのかなと、「心の闇」というのが源氏のテーマなんでしょうけれども、そういうふうに思っています。もう一度、源氏を現代語訳したのしか読めないのですが、読んでみたら面白いんじゃないかなと思いました。とにかく、20年近い前の研究成果をこんな形で思い出させていただいて、非常に感謝しております。ありがとうございます。

福田 そうですね、気がつかないうちにもう20年近くたっていたということになります。「心の闇」というのは、当然ですが、夏山先生も意識しながら小説をお書きになったんでしょうね。

夏山 そうですよ。面白い平安ものを書こうとあっていろいろ、この部分は面白いんじゃないか、この事件は面白いんじゃないかと考えるのですが、結局テーマというか、何を中心にどういうことを描いていきたいんですか、と言われたときに、中心になる何か考えとか、思いとか、そういったものがあつた方が、それを筋にして、お話を作っていくやすいし、説明もしやすいわけです。そういう中で有名な和歌とか紫式部が大事にしていた和歌とか、そういうものを持ってきた方が、非常にすっきりと作ることができるところで、意識してみました。

福田 なるほど、一つの芸術作品ができあがるにあたっては、文化の積み重ねといえましょうか、いろんな方のいろんな行動の結果というものを、例えば、夏山先生が吸収されて新しいものを作り出していく、ということですね。なんかすごく醍醐味みたいなものを感じました。

そういうふうな意味からいきますと、例えば、岩坪先生の源氏いけばなですが、これも本との出会い、それから人と人との出会いということで、今回の矢野環先生との出会いが、大きかったというようなことが、きっかけの一つとなったということをご著書にも書かれていたところですよ。

やはり岩坪先生、この源氏いけばな関係の、お櫃とおっしゃいましたか、書物の蓄積をご覧になったときには、さすがにドキドキなさいましたでしょうね。

岩坪 本当にご縁があって、矢野先生に教えていただきましたということですし、それから、また東京大学でたまたま時間があつたということも一つのご縁です。また最後のお家元をご存知のご住職と巡り会ったこととか、あるいは、徳大寺家の菩提寺とたまたま当時、同志社高校の先生が同じ町内にお住まいだったとか。本当に人のご縁、書物との縁に導かれて、ようやく去年1冊にまとめられたな、という感じがします。

福田 そういった出会いとご縁と今おっしゃいましたけれども、そのご縁は公開講演会に集ってくださった皆様とか、それから、

今、ご視聴の皆様なども、ひょっとするとこれから先にそういったご縁と結びつくきっかけになるかも知れません。そういうふうなことで岩坪先生とそれから矢野先生に関しましては、私もちょっと一枚絡んでおまして、ご紹介を確か私がしたんじゃないかなと思います。

岩坪先生、矢野先生のさまざまな学識と申しましょうか、先ほどもちょっとご紹介いたしましたけれども、もともと理学博士でいらっしゃるというところで、伝統文化に限らず、アイドルにも詳しくいらっしゃるわけなんですけど、岩坪先生からご覧になって矢野先生はどのような先生でいらっしゃいますでしょうか。

岩坪 一言で申しますと幅広い。私はちょっと数学とか苦手によく分かりませんが、本当に幅広くていらっしゃるって、万能の天才というのは、こういう方を言うのかなと思います。少し褒めすぎましたかね。

福田 今回の矢野先生のご講演の内容をご視聴になった方々も思われていると思います。大きく言えば文化ということで今回は公開講演会を開かせていただきましたが、いろんな形で数値が出てきているということも、今回の公開講演会の一つのポイントになるかと思います。

それで、矢野先生のご講演でもそういったことがフルに生かされておまして、これは、直接源氏物語に興味がおありじゃない方も、こういったところから入ってこられることで、深い文化の

ひとつひとつが分かりやすいのかなという気もしております。そんな中で、今回はオンライン公開講演会ということで、ご質問をちょうだいしておりましたが、一件、矢野先生に対してご質問が来ております。この方、お名前を申し上げてよろしいですかね。小野原 彩香様からちょうだいしております。私の方からご質問はお読みしますね。「矢野先生のご発表、『薫物から見る源氏物語、うつほと栄花の間』」に対して質問があります。うつほには薫物の名前が頻出する一方で、源氏、栄花にはうつほほど出ないということでしたが、源氏、うつほでは、分析に使ったものと別の表現、あるいは、暗喩的な表現で出現するということは考えられないのでしょうか」というご質問でございます。

先生いかがでございましょうか。

矢野 今回、省略しているのがあります。それは、香りの、「香る」という言葉、そのものは取ってないんです。「香る」というのは、材料がどうのこうの、という話もあるけども、単に「香る」とか出てくる場合は、前後を解釈しないといけないので。それもできますが、どういうシチュエーションかとかタグ付けすればいいんだけど、それをまず入れてません。

それから、薫物が香っているけど、そういう言葉が出てこないで、「追ひ風」とだけ書いてあるのがあります。そうすると、古典文学でも薫物がどこからともなく匂ってくるとかいうので。それも、どういう状況で香ったのか。他に薫物の香りがとか言わなくてもいいわけです。「木の追ひ風」とかいうふうなことだけ書

いてある。それも、共起とはちょっと取りにくいんです。その前後関係の説明をしないといけない。だから、そういうのは全部抜いています。

だから、暗に薫物が出てくるというものはあるんですが。それから、暗喩的な掛詞的なことを言っておられるかもしれないんだけど、それはあんまりないと僕は思っています。きちんと見れば、和歌を全部チェックするということもあり得ると思うんですが。

そういうところで、別の表現というのもあり得るかもしれない。とにかく、今回は表層に出てきている、そういう言葉だけですかせております。

福田 それでも共起という一つの視点というのはかなり有効に機能するところだと思うんです。先生、このご視点はあと何か発展的にこういう方向へというようなお考えはございますでしょうか。

矢野 ちょうどこういうものがあったのですが、困ったのはこの3つしか大量に出てこないんです。だから、他のいろいろなことでも、何か、たくさん出てくるもの、長編で比較しないとけないけど、そういうものでなら何かあり得ると思います。共起というわけじゃないんだけど、昭和24年にすでに上村悦子という方が「あはれ」とか「をかし」というのを、当時の全集で何回出てくるか、ということ調べて、議論された例もあります。ああい

うのも、そういう観点から言うと、「あはれ」と「をかし」と何が共起されるかとか、面白いかなと思っています。まだ、何もしていません。

福田 矢野先生は今年3月に同志社大学文化情報学部をご退職なさいまして、それで普通でしたら退職記念講演会をするはずだったんですけども、折からの状況でできませんでしたが、この公開講演会が代わりにはなりませんけれども、先生のお話を伺える一つの機会と思って設けさせていただいた部分もごさいます。

そうすると、今日のお話を聞きましたら、まだまだ矢野先生にはご活躍をご期待してもよろしいようですので、また機会を設けましたらよろしく願いをいたします。

それから、私からもう一点質問なんですが、源氏物語の梅枝と絵合。今回の視点からの分析では、何かちょっと違うということだったと思うのですけれども、それは何に由来するものでしょうか。お考えがごさいますか。

矢野 梅枝はたぶん、ああいうシチュエーションをセットして、それで薫物のことで全部書こうということでやったんでしょうね。絵合のところは薫物で出てきてもいいんだけど、必要ないからあんまりやめといて、調度品の話ばかり、しかも天徳四年のものから引っ張ってきたみたいなのが結構あるから、別個に考えていろいろ典拠を考えたのではないかと。うつほの方は、典拠を考えずに、そのころ、自然にあった状態で書いたのではないかな

と。

福田 そうすると、源氏でも、というと、大雑把な言い方になりすぎてしまいますけど、巻ごとの、そういった志向といいたしうか、何を描こうとしているのかというようなことについては、例えばこういう単純な言葉の分析であっても、あぶり出されるものはひょっとしたらあるのかもしれないね。

こういうことを考えると、先ほどの天徳四年の内裏歌合の州浜ですが、あれは大変美しかったですけれども、ああいうのを見えますと、吉田さん、いかがでしょう。今、文献を主に扱っていらっしゃるけれども、ゼロックスさんの技術からいたしますとやっぱり印刷かなと思うのですが、ああいう立体物はいかがでしょう。州浜とは申しませんが、例えば貝合わせの貝などは？

吉田 貝合は先生からご依頼いただいて、今、いろいろわれわれゼロックスだけじゃなくて、関係する印刷業界のパートナーさんともご照会しながら、しばらくお待ちいただきたい。チャレンジさせていただけたらと思っています。

福田 あれは曲面ですから、かなり難しいですよ。

吉田 そうですね。やはり難しいですが、やりようはあろうかと思えますので。

福田 先ほどはお時間が短かったのですが、もっとお持ちになったものでこれはというものはございますでしょうか。

吉田 生け花と同じだったので……。

福田 せっかくですので……。矢野先生、すみません。いつも何かお願いしてばかりで。

〈吉田氏と矢野先生がカメラに生け花の絵などを映している〉

吉田さん、これは複製ですよ。

吉田 ええ、複製。

福田 今さら司会が聞くのもなんですが。

吉田 耳なし芳一の、汚れとか。富山大学さんとか、こういった崩しなどはリアルな……。こういった淡い……

福田 それは何ですか。今、映してありますのも、池坊さんの生花の伝書ですね。なるほど、なるほど。もうちょっと見せてください。矢野先生が持っていらっしゃるもの。さっぱりとして……。これは何ていうかな、お家元が生けられた……。

吉田 これは、貴重だったんで、資料館ではガラスの中に入れて、湿度も温度も調整しているけれども。これは蛇腹で折本なので、なかなか繊細な……。ガラスの中ではめくれないので。

福田 文政3年ですね。これは、綴じは粘葉装？

矢野 いやいや、バタバタでね。

福田 折本？

矢野 雲母（きら）がキラキラの。雲母刷りにしてあるんで、キラキラ光りよるんですね。

福田 そうすると、もし、複製を自分で持っていたら、わーっと広げてみたりとかできるわけですね。

吉田 展示会などでこれを公開されています。複製です。非常に好評です。

矢野 西川一草亭は、これにまねたのを作って……。割と少ない。さっきのこっちが表紙です。

福田 表紙ですね。ありがとうございます。そうすると、京都という土地柄もあって、こういうふうな伝承をしていくということ

ですよ。本物はもちろん貴重で、さすがにみんなで見るというわけにはいきませんが、こういった形でできればそこから学ぶこともできるということになりますね。

今回は源氏物語の文化ということで、生花、それから薫物、そして現代に通じる小説というようなこと、そういった言葉とか文化を、もの、文書の複製という形でさらに現代人にとっても、より身近なものになるようにという活動をしていらっしゃる企業の方のお話を伺いました。全体にわたりまして、いわゆるその文化伝承というものを、どういうふうにやっていくか。源氏文化という一つの文化を、中心におきまして、いろいろ視聴者の皆様にご考えていただけたら、これまたご縁が広がってくるんじゃないかなと考えたりしています。

もうお時間も最後になってまいりました。今回、公開講演会のご講演をなさって、そして他のご講演を聞いて、パネルディスカッションをいたしました。それでは、最後に、順番に一言ずつご感想をいただきましたらと思います。岩坪先生からお願いいたします。

岩坪 普段は文字ばかり見ておりますので、矢野先生のご講演とか富士ゼロックスさんに複製を見せていただきまして、本当に幅広く、改めて源氏物語の豊かさというのを感じることができました。ありがとうございました。

福田 ありがとうございました。それでは矢野先生、お願いいた

します。

矢野 以前、東京の大学にいた頃に、東京のある大学の先生に神田の古本屋で源氏のことを聞かれて、申し上げたんですけど、結局何も調査されなかった。だから、こういうものは確かにチャンスをうまく生かせるかどうかは、そういうときの状況次第だといろいろ思います。

福田 ありがとうございます。吉田さん、お願いします。

吉田 今日は、機会をいただき、ありがとうございました。ますますゼロックスは最新技術を使って、得意なところで、文化、歴史のお役に立てればなと思っています、何か、ご支援できることがありましたら、これを機会にいただきたいと思います。

福田 よろしくお願いします。それから、夏山先生、いかがでしょうか。

夏山 歴史小説を書くということで、大学の研究機関でのさまざまな分野での研究成果が、新しい歴史小説を書くのに非常に大きな支えに私の場合はなっています。ですから、こういう機会や、そこで新しく香道のこととか、生け花のこととか、自分ではなかなか気づけないようなことに接すると、そこからまた面白い話が思いつけるのではないかなという、契機になりますので、そうい

う情報をなるべくキャッチしながら、新しい小説をまた作っていきたいと思います。

福田 夏山先生、次回作、期待しております。それから、竹田先生よろしくお願いします。

竹田 大変門外漢なのですが、一文学ファンというか小説好きというか、そういう立場で楽しませていただきました。9年ぐらいすると、多分引退させてもらえるので、そしたら、好き放題にまたこの世界を覗いてみたいなと思いました。ありがとうございました。

福田 では、その時には私も一緒にさせていただきたく、よろしくお願いします。

それでは、ちょうどお時間になりましたので、これをもって同志社大学人文科学研究所第98回公開講演会、「生き続ける『源氏物語』よみがえる紫式部—令和時代の古典の楽しみ方—」を終わらせていただきます。

長時間にわたりご視聴くださりまして、誠にありがとうございました。それから、ご参加くださいました先生方どうもありがとうございました。

公開講演会のアンケートに、視聴者の方、ぜひご協力をよろしく願いいたします。YouTubeの説明欄に、アンケートフォームがございますのでご覧ください。

それから、本公開講演会のブックレット、この講演録ですけれども、ご希望の方は同志社大学人文科学研究所のホームページからお申し込みください。これは無料です。よろしくお願いします。

それでは皆様、どうもありがとうございました。ご縁を結ばせていただき、ありがとうございます。それでは終了させていただきます。ありがとうございました。